

学生が効果的に感じる 英語発音トレーニングの実践報告

Report on the Effective Teaching and Learning of English Pronunciation

牧野真貴
Masaki Makino

In Japan, the English education system has provided less importance to teaching English pronunciation. This has resulted in students' poor English accent and lack of confidence while speaking. The author has taught English to junior students at a university. The students' reading and grammar ability were satisfactory. In contrast, their English pronunciation was dissatisfactory and they spoke English with a strong Japanese accent. That is, they did not seem to be conscious of English sounds. The author discovered that more than 70% of the students had never been taught English pronunciation at school until then. Accordingly, the author provided English pronunciation training in class and attempted to teach them the manner of articulation. The purpose of the training was to enhance students' awareness of English pronunciation and make them realize their improvements in pronunciation. The training comprised three sections: (1) teaching consonant monosyllables, which Japanese people consider difficult to pronounce; (2) singing English songs to learn English rhythm and linking; and (3) speaking to confirm their accomplishment. As a result of the training, the students not only noticed their shortcomings and improvements in their own pronunciation but also expressed a strong interest in learning the manner of articulation. This paper elaborates on the English pronunciation training, which the students considered enjoyable and effective.

キーワード：英語発音、トレーニング、携帯電話、英語の歌、スピーキング

1. はじめに

日本人は英語発音が苦手だと長く言われているが、その状況はなかなか改善されない。有本(2010)が、高校教員を対象に、英語検定教科書の発音に関するページの使用について調査を行った結果、授業で発音を取り扱う教員数がわずかであるということが明らかになった。その原因の一つとして、教員免許に英語の発音に関する科目の必修義務はなく、英語音声学を学ばなくても免許が取得できることを挙げている。河内山ら(2011)が中学校英語教員を対象に発音指導のアンケート調査を行った結果でも、回答者は大学の教員養成課程において発音指導を学

ぶ機会がなかったと答えており、発音指導を行える教員が養成されにくいことが示唆される。従って、多くの大学生は、正しい調音法を学ばず英語を話し、自身の発音の誤りに気がつかず、それが改善されないまま今日に至っていると考えられる。社会のグローバル化により、ますます英語の必要性が高まっている。従って、大学授業においては、読解力や文法力を伸ばすだけではなく、発音といった学生が学ぶ機会の少ない技能も指導することにより、総合的な英語力を向上させることが必要ではないか。

2. 研究の背景

筆者が担当する大学3年生のクラスでは、学生の英語読解力は高いが、英語発音はそれに伴っていないように感じられた。学生は英語の調音法やリズムを理解していないだけではなく、英文を読ませると不適切な個所で区切り、単語においてはローマ字読みをするといったことが往々にして見られた。また、英語を話す際、聞き手に伝えようとするのではなく、英語が呪文のように口から出るといった様子であった。学生全員とはいえないが、多くが音を意識せず英語を話しているように見受けられた。これまでの英語授業で発音指導を受けて、習ったことを習得していないのか、あるいは発音指導を全く受けたことがないのかはわからないが、この状況では、英語が彼らにとってコミュニケーションの手段になるとは考えにくい。受講生の学年が3年生ということを考えれば、順調に単位を取得すると、筆者の授業がカリキュラム上、大学で英語を学ぶ最後の機会になる。義務教育の頃から長く学んでいるにもかかわらず、英語を英語らしく話さないまま英語教育が修了することは残念なことである。この状況を改善するために、授業で発音指導を行うことを考えた。しかし、教師の後に続いて、単語をリピートするだけの発音指導では、学生が自身の発音の問題点を把握しないため、何をどのようにして改善すればいいかわからず、せっかくの機会が台無しになる恐れがある。調音法の解説を行い練習した後、映像で自身の口の構えを確認する機会を設ければ、学生は誤って英語を発音していたことに気づき、それを改善するために努力するかもしれない。その上、調音法の知識を得ることで、正しい発音を意識して英語を話すようになることも考えられる。また、発音の向上を実感すれば、さらに意欲的に発音練習に取り組み、調音法の知識や英語を話すことへの興味が深まることに期待できるであろう。

3. 研究の目的

本研究では、学生が自身の発音の誤りを認識するとともに、英語発音への意識を高めることを目的として英語発音トレーニングを行う。さらに、トレーニングを行った結果、学生が発音の向上を実感することも目的とする。

4. 手続き

4.1 対象者

本研究の対象者は、私立大学に通う英語非専攻の大学3年生2クラス81名である。学生は週に2度英語授業を受講し、そのうちの1時間を筆者が担当した。授業はリーディングであり、学生の英語読解力は一部の学生を除き全体的に高いが、発音は初心者のレベルに近い学生が多いと感じられる。

4.2 トレーニングの手順

4.2.1 事前調査

トレーニングに先駆けて、学生が中学校からこれまでの英語授業で発音指導を受けたことがあるか¹⁾、また、自主的に発音練習を行ったことがあるかについて尋ねた。その結果を表1に示す。これを見ると、70%以上の学生は発音指導を受けておらず、また、自主的に発音練習を行った経験のある学生が30%に満たないことがわかった。従って、授業で見られた学生の問題点は、発音指導を受けていないため、自己流で英語を話していることが原因の一つだと考えられる。また、発音を良くしようと練習した学生が少ないことから、練習方法がわからない、あるいは、学生の英語発音への意識が高くないことが窺える。

表1 トレーニングの事前調査

n=81

発音指導	人数	%	発音練習	人数	%
あり	22	27.2	あり	24	29.6
なし	59	72.8	なし	57	70.4

そこで、学生が英語の調音法をどの程度理解しているかを把握するため、牧野（2012a）で取り扱った子音単音について、どのように発音するか調音法を書かせた。それを見ると、/f/については、前歯で下唇をかむ、/θ/については歯で舌をかむという記述が複数見られた。その他の記述について、一部を表2に示す。これらは正しい英語調音法とは考えにくく、調音法の知識を持たない学生が多いことが確認できる。

表2 学生の考える英語発音調音法 (抜粋)

/f/	<ul style="list-style-type: none"> • ほほを左右に引いて軽く息を出して発音する • 「う」の口から「い」の口に変えて、一気に息を吐き出す 	/si/	<ul style="list-style-type: none"> • 舌を歯の裏につけて発音する • 唇を半開きにして空気を出す
/v/	<ul style="list-style-type: none"> • すばやく口を動かして息を出す • 唇を膨らませて音を出す 	/zi/	<ul style="list-style-type: none"> • 舌を上あごに当てて、息をもらす • 「い」の口で舌を鳴らす感じ
/θ/	<ul style="list-style-type: none"> • 舌を上あごにつける • 軽く下を曲げて息をそっと出して発音する 	/r/	<ul style="list-style-type: none"> • 下をくるっと巻いて、巻きを外すとともに息を押し出す • のどから声を出す
/ð/	<ul style="list-style-type: none"> • 下を軽くふるわせて音を出す • 「い」の形の口にして強く息を吐く 	/l/	<ul style="list-style-type: none"> • 舌打ちのように発音する • 巻き舌のまま、舌尖を上あごの後ろの方につける

4.2.2 トレーニングの手順

対象授業は週に1度行われた。発音トレーニングは授業開始から第4週目に開始され、第7週目まで合計4回実施された。指導内容と所要時間を表3に示す。授業はリーディングを中心に進められたが、第1回目のトレーニングは、90分全てを子音単音の調音法指導にあてた。第2回目以降は、授業前半にリーディングを行い、授業後半30分、あるいは50分を使用してトレーニングを実施した。

表3 各回のトレーニング内容

	指導内容	所要時間
1回目	子音単音の練習	90分
2回目	英語の歌 (英語のリズムや音のつながりの練習)	30分
3回目	英語の歌 (英語のリズムや音のつながりの練習)	30分
4回目	スピーキング (発音練習の成果確認)	50分

(1) 子音単音の練習

本取り組みでは、時間的な問題で、全ての音声について指導することが困難と判断した。そこで、ターゲット音として、英語学習者から発音指導の要望の多い子音の一部 (牧野, 2012a) である /f/, /v/, /θ/, /ð/, /si/, /r/, /l/ に加えて、/zi/ を練習することとした。調音法の説明は表4のとおりである。これは、有本ら (2009) の発音調音法の文言を筆者が修正したものであり (牧野, 2012a)、本研究では /zi/ の説明を追加した。子音単音のトレーニングでは筆者が手鏡を用意し、学生に口の構えを確認させた。さらに、携帯電話の動画撮影機能を利用し、自身の発音時の口の構えを学生に撮影させた。撮影時に発音したターゲット音を含んだ単語は、fish, vest, thank, mother, sit, zip, right, light であり、下線部に注意して発音させた。これらの単語は、zip 以外は牧野 (2012a) の練習材料に含まれる語である。トレーニング1サイクルの手順を表5に示す。これは、同じ口の構え、例えば /f/ と /v/、を1~5の手順通りに同時に練

習し、それが終われば音を変えて、最後の /r/、/l/ まで合計 4 サイクル行った。/r/、/l/ は口の構えが異なるが、調音法の違いを示すために同時に練習させた。発音練習はグループで行い、筆者はできるだけ多くの学生に助言が与えられるよう、練習中は教室を回った。本研究における発音の自己評価の基準であるが、学んだ調音法と照らし合わせ、口の構えが、非常によくできている：5 > 全くできていない：1、の 5 点満点とした。

表 4 英語調音法の説明

f, v	上の歯に下唇の内側を軽くつけて、息を強く吹き付ける。声を一緒に出せば /v/ になる。
θ, ð	口を軽くあけ、舌先が上の歯先に軽く触れるようにする。その時舌先が正面から見えるように手鏡などを使って位置を調整し、上の歯と舌先が出会う場所にある狭い隙間に息を強く吹きつける。この構えでゆっくり息を吐き、その時出るのが /θ/ の音で、声を一緒に出して濁った感じの音を出すと /ð/ になる。
si, zi	日本語のサシセソをゆっくり発音し、「シ」の時には舌がやや後方に下がって上の歯の後ろにある歯茎の出っ張りに広く近づいていることを確認する。「ス」の口の構えから /i/ をつなげるように練習する。声を一緒に出せば /zi/ になる。
r	舌の真ん中に大きな鉛玉を乗せるような感じで、くほみを作り、舌先はどこにも触れないようにする。唇を丸く突き出したような形にし、そのままの口の形で「ウー」と長めに声を出す。ここから、後ろに続く音になめらかに移る。
l	舌の先の方を、上の歯の後ろにある歯茎の出っ張りにグッと強く押しあて、舌の隙間からややこもった音を長めに出す。

表 5 子音単音トレーニング 1 サイクルの手順

1	学生は調音法の説明を受ける前に、ターゲット音を含んだ単語を発音し、その様子を携帯電話で撮影する。但し、その映像はしばらく見ることはできない。
2	教師が調音法の説明を行い、口の構えのモデルを見せる。教師の後について、ターゲット音を含んだ単語を練習する。
3	手鏡を使い口の構えを確認しながら、グループで発音を練習する。
4	練習した後、最初に撮影した自己の映像を確認し、5 点満点で自己評価を行う。また、振り返りシートに、映像を見て発見した自己の発音の問題点を書き、その改善策や練習の感想も書く。
5	振り返りシートのコメントを参考に、発音をさらに練習した後、同じ単語を発音する様子を携帯電話で撮影する。その後すぐに映像を確認して 5 点満点で自己評価する。

(2) 英語の歌

トレーニング第 2、3 回目は、すでに学習した音を意識しながら、さらに英語のリズムや音のつながりについて理解させるため、英語の歌を歌った。授業で歌った曲は、第 2 回目は“Day Dream Believer” (Monkees)、第 3 回目は“Bad Day” (Daniel Powter) であった。これらの曲を選んだ理由は、筆者がこれまで担当した大学生の間で人気があり、楽しく歌えることと、曲のスピードがほどよいと歌いやすいと判断したからである。指導の手順であるが、まず、歌いやすくなるよう曲を聞かせた。しかし、ただ聞くのではなく、学生が歌詞の英語を意識す

るよう牧野(2010, 2012b)を参考に、歌詞の一部を抜いて空所を作った歌詞シートを配布し、曲²⁾を聞きながらその空所に聞こえた単語を書きとらせた。曲を2回聞いた後、学生はグループでシートを確認しあい、わからないところは意見交換を行った。さらに、もう1度曲を聞き、グループで再度シートを見合わせた後、答え合わせをする。次に、シートを見ながら、クラス全員でCDに合わせて歌を歌うが、その際、歌いにくいと思った箇所の下線を引くこと、また、すでに練習している子音単音についても意識して、正しい発音で歌うことを指示した。一度歌い終わった後、どこが歌いにくかったかをグループで確認しあい、どのように発音すればよいかを考える。その次に、筆者が歌詞に沿って一行ずつ英語のリズムや音のつながりについて解説する。例えば、“You had a bad day.”であれば、“You・had・a・bad・day.”と日本語のように一語一語明瞭に発音するのではなく、“had a”の下線部を「ダ」のようにつなげて発音するということを説明し、筆者がその部分を歌って聞かせた。学生は説明を受けた箇所を、CDをかけずにクラス全員で数回歌う。さらに、うまく歌えない箇所はグループで練習し、その間、子音単音のセッションと同じように、筆者は学生の発音に助言するため、教室を回った。最後に仕上げとして、全員で一緒に歌う。なお、歌のセッションでも、子音単音の練習と同じように、練習前・練習後に2～3文を発音させ、携帯電話で撮影させた。この場合は口の構えを比較するのではなく、英語のリズムや音のつながりに変化があるかを聞くためである。

(3)スピーキング

トレーニング第4回目では、練習の成果を確認するため、クイズ形式のスピーキング活動を行った。学生全員が自分自身についてのクイズを英語で作り、発音を意識して発表し、クラスメートはシート³⁾にその解答を記入していく。クイズ出題の英語は3～4文程度とし、解答は三択式にした。このようなクイズ形式のスピーキング活動にしたのは、「自分の英語を伝えたい」、「友達の英語を聞きたい」という学生のコミュニケーションへの意識を高めるためである。スピーキングの手順は、座席の前方から順に1名ずつ、自分の席からクイズを出題し、他の学生は答えの3つの選択肢の中から1つを選んで解答番号をシートに記入する。5名の出題が終わった時点で先頭に戻り、出題者5名が再度順に正解を発表する。この流れを学生全員が発表し終わるまで行う。発表されたクイズの一例を以下に示す。

I watched a DVD at my friend's house on Sunday. It was very exciting and I recommend it to you. Question! Which DVD was it?

1. Alice in Wonderland
2. Men in Black
3. Pirates of the Caribbean

学生が作成したクイズの内容はバラエティに富み、選択肢のどれが正解か見当がつかないものが多々あった。しかし、難題であるがゆえ、学生は各クイズに興味を示し、解答することを楽

しんでいるようであった。筆者も、クイズに耳を傾け、学生と一緒に正解を考えた。

4.2.3 発音トレーニングの効果確認方法

子音単音のセッションでは、携帯電話で撮影した映像を見て採点した自己評価の練習前・練習後のスコアの伸びを分析した。また、携帯電話で撮影した練習前・練習後の映像を比較し、発音の向上を学生が実感したかどうかについてアンケートを行い、この回のトレーニングについて感想も書かせた。さらに、発音トレーニング第4回目終了後に、発音トレーニング全体について感想を自由に書かせ、その記述内容を参考に、翌週、発音トレーニングについて、リッカートスケール5件法のアンケートを実施した。トレーニング時の学生の様子も観察している。

5. 結果

5.1 子音単音練習の効果

表6は口の構えの自己評価記述統計量である。練習前の評価を見ると、学生は/θ/を最も苦手な音としており、/si/が一番発音しやすい音であったことがわかる。練習前・練習後の自己評価の変化を調べるため、5%水準でt検定を行い、自己評価のスコアを分析した。その結果、全ての音について有意な伸びが見られた（表7）。さらに、子音単音練習の効果を自覚したかどうかを確認するため、第1回目のトレーニング終了時にアンケートを行い、同時に子音単音練習の感想も書かせた。アンケート結果を表8に示す。84%の学生は子音単音練習について「効果あり」と回答し、16%が「わからない」を選択している。また、「効果なし」と感じているものは一人もいなかった。

表6 発音自己評価記述統計量

	度数	練習前				練習後			
		最小値	最大値	平均値	標準偏差	最小値	最大値	平均値	標準偏差
f	81	1	4	2.0	.83	2	5	3.8	.69
v	81	1	4	2.1	.87	2	5	3.9	.76
θ	81	1	4	1.9	.89	2	5	3.8	.82
ð	81	1	5	2.0	.97	2	5	3.7	.75
si	81	1	5	2.7	.91	2	5	4.2	.73
zi	81	1	4	2.6	.89	2	5	4.1	.75
r	81	1	4	2.0	1.00	2	5	3.8	.88
l	81	1	4	2.1	1.09	2	5	3.9	.79

表7 自己評価 *t* 検定結果

n=81

	平均値	標準偏差	<i>t</i> 値	自由度	有意確率 (両側)
f	1.815	.937	17.433	80	.000**
v	1.815	.882	18.520	80	.000**
θ	1.852	.923	18.048	80	.000**
ð	1.704	.928	16.524	80	.000**
si	1.531	.867	15.886	80	.000**
zi	1.506	.808	16.774	80	.000**
r	1.852	.882	18.898	80	.000**
l	1.728	.975	15.957	80	.000**

** $p < .01$

表8 子音単音練習の効果について

n=81

	効果あり	効果なし	わからない
人数	68	0	13
%	84	0	16

学生の書いた感想の一部を以下に示す。なお、() は筆者による補足である。

(1) 「効果あり」を回答

- このような機会がなければ、自分の発音がこんなにもめちゃくちゃだということに気づけなかった。この短い時間でも成長を感じたので、今日の練習が無駄にならないように、今後少しずつ練習したい。
- 初めは、授業で(発音練習を)してもすぐ忘れるだろうと思ったが、自分の口を見ながら練習をすることで、頭に口のイメージが残った。まだぎこちないが、イメージしながら発音すると上手にできるし、ネイティブ・スピーカーに近い音が出せる。
- 長く英語教育を受けてきたにもかかわらず、自分の英語の発音が全くできていないということに驚いた。練習前の音を(練習後と)比較すると、発音法は違うはずなのに、全て同じような口の動かし方をしていた。発音練習をしっかりとした後は、単語が全く違った言葉になったと感じた。
- 映像を見て、自分の発音が全くできていないことがショックだった。鏡を使って練習し、映像で確認すると、驚くほど上手に発音できていた。このような練習をもっと早い時期にしておきたかったと思う。

(2) 「わからない」を回答

- 発音方法を教えてもらい、劇的に発音に変化していることに感動した。しかし、今まで発音練習を受けたことがなく、発音の良い、悪い、の判断基準がわからないので、自分で良くな

ったと思っても、本当に効果があったかどうかは判断できない。

- 初めてこんな練習をしてとても新鮮で楽しかった。口の動かし方はわかったけど、これで英語が伝わるかどうかはわからない。正しい発音で英語を話す練習がしたい。
- 発音方法は理解できたが、1回で上達するものではないので、効果はわからない。1ヶ月1回程度このような練習をしてほしいと思う。

「効果あり」を回答した学生は、自身の誤った発音に気がつき、練習により発音の向上を実感している。「わからない」を回答した学生においても、トレーニング前後の発音の変化を認識し、調音法が理解できたとしている。その上、さらなる発音練習の機会を望んでおり、子音単音のトレーニングにより、学生の英語発音への意識が高まったことが示唆される。

5.2 発音トレーニング全体についての感想

発音トレーニング第4回目終了後に、発音トレーニング全体について感想を自由に書かせた。その一部を以下に示す。なお、（ ）は筆者による補足である。

(1) 英語の歌に関する感想

- 歌を歌うトレーニングは「英語が苦手」を忘れ、達成感と満足感が得られる時間になった。
- 教科書に書いてあることをひたすら発音するだけでは、楽しくもないし、頭に残らない。しかし、歌を聞きそれを発音することで音の印象が残るし、何よりも楽しく、学習意欲がわいた。
- 自分は英語を一語ずつ読むことが当たり前だと思っていた。しかし、トレーニングで“carrying on”をくっつけて発音するというコツを習うなど、一つ一つの取り組みを通して、自分の発音が鍛えられているのを実感した。（トレーニングは）とても良い機会だった。
- 歌い終わった後、口が異様に疲れた。普段の日本語と違う音を意識したからだと思うと、英語の発音がうまくなったような気がして、達成感があった。今後も積極的に英語の歌を歌って練習していきたいと思う。
- 歌の練習では、音のつながりを意識し、友達と正しい発音について考えることで、自分の発音の問題に向き合うことができた。英語の歌はリスニングの練習にもなり、とても有意義な時間だった。
- トレーニングに刺激され、自宅で洋楽を聞いて歌ったら、音のつながりが少しずつわかってきた。英語の歌を聞きながら歌詞を見て歌うことは、英語力を高めるのに効果があると思う。
- 英語の歌を聞くとリズムが頭に残るし、そのリズムに合わせて歌おうとすると必然的に発音を変えないといけな。だから、どんなふうに歌われているか集中して（曲を）聞いた。グループの話し合いの最中は、気がつくと自然に歌を口ずさんでいて驚いた。

(2) スピーキングに関する感想

- クイズの発表時は、クラスメートにわかりやすく伝えようと思った。だから、発音を意識して、聞き取りやすいように話した。発音とスピーキングの練習だったが、ライティングの練習やコミュニケーションの場にもなり、「今日は勉強した」と思えた。
- クイズの発表は、みんなに聞かれているので、発音をとても意識した。そして人の発音も気になり、できていないとか、上手とか、頭の中で自然に評価していた。

(3) 全体的な感想

- 大学英語授業はレベル分けがないが、発音トレーニングは自分のように英語が劣っている学生でも、平等に受講できると思う。これまで文法や長文読解が自分の英語のイメージだったが、発音トレーニングでそれが変わり、英語は楽しめるものだと思った。「英語は話すもの」を意識できたし、発音が重要だとわかった。何より自分の発音のどこが間違っているかがわかったことが良かった。今後このような実践的な授業が増えてくれたらと思う。
- トレーニングを受けて、もっと発音を上達させたいと強く思うようになった。誰かにさせられるのではなく、自分から練習したいと思ったことに驚いたし、トレーニングは効果的だと思った。

上記以外のコメントを見ても、発音トレーニングにマイナスなイメージを持っているものは無く、学生がトレーニングを有意義な時間だと考えていることが窺えた。「積極的に練習をした。」「もっと発音を良くしたい。」「発音方法を理解した。」などのコメントが複数みられ、中でも「楽しかった。」「トレーニングの効果を実感した。」が目立って多く、学生が楽しみながら、英語発音を向上させたと感じていることが窺えた。

5.3 発音トレーニングに対するアンケート結果

5.2の「発音トレーニング全体についての感想」を参考に、筆者がリッカートスケール5件法のアンケート（5：非常にそう思う＞1：全くそう思わない）を作成し、それを発音トレーニング終了の翌週に実施した（表9）。尺度の信頼性は、クロンバック $\alpha = .865$ と、 α の数値が高いことから、本尺度の内的整合性が認められたと考えられる。これを見ると、「8. クイズ発表時は、正しい発音を意識した。」以外は全て4以上の値を示し、学生が発音トレーニングを有意義なものとしてとらえていることが示唆される。質問8についても、3.8は低い値とはいえないが、学生のコメントを調べて、他の項目より低い数値になった原因を探った。すると、「人前で英語を話すことに緊張して、発音がおろそかになったかもしれない。」「緊張して発音がごちこちなくなった。」といった「緊張」が原因と思われる記述が見られた。これは、学生が英語を人前で話すことに慣れていないためだと考えられる。発音練習とともに、スピーキングの回数

を増やすことで、人前で英語を話す時の緊張が軽減されるであろう。

表9 発音トレーニングに対するアンケート結果

質問	平均値	標準偏差
子音単音のトレーニング		
1. 子音単音のトレーニング後、授業で英語を話すときは正しい発音を意識している。	4.0	.775
2. 子音単音のトレーニング後、発音の向上を実感した。	4.1	.711
3. 子音単音のトレーニングにより、教えられた英語の調音法が理解できた。	4.1	.673
4. 他の音についても授業で練習したい。	4.3	.798
英語の歌のトレーニング		
5. 英語の歌を歌うことで、英語のリズムや音のつながりが理解できた。	4.6	.639
6. 英語のリズムや音のつながりを練習すると、歌が歌いやすくなった。	4.6	.563
7. 英語の歌を歌うことは発音練習のために良い。	4.7	.486
英語の発表		
8. クイズ発表時は、正しい発音を意識した。	3.8	.830
9. クイズ発表時は、クラスメートに伝えようと話した。	4.0	.733
10. クイズ発表時は、クラスメートの英語を聞き取ろうとした。	4.2	.732
11. 今回のような英語の発表は発音練習の成果を確認するのに良い。	4.3	.818
発音トレーニング		
12. 発音のトレーニングは効果的であった。	4.6	.585
13. 発音のトレーニングは楽しかった。	4.7	.595
14. 発音のトレーニングで学んだことは、今後の役に立つ。	4.6	.631

5.4 発音トレーニング中の学生の様子

(1) 学生の様子

第1回目の子音単音の練習時は、普段触ってはいけないとされる携帯電話を使用することで、学生のトレーニングに対する興味の高まりが感じられた。手鏡を見ながら何度も口の構えを確認する、映像を見ながら、「ここができていない。」「練習後は上手になっている。」と友達と意見交換を行う、など積極的に発音練習に取り組む姿が見られた。また、授業終了時は「もう終わり？」といった声が聞かれ、学生が時間の経過を速く感じたことが窺えた。

第2回目のトレーニング前は、大学3年生が授業で歌を歌うのかという懸念があった。しかし、歌わせてみるとCDに合わせて声を出し、英語のリズムや音のつながりの練習時にも、グループで声を揃えて歌う光景が見られた。また、「この部分をもう一度教えて下さい。」と熱心に質問する学生や、「この部分が歌えるようになりました。」と筆者に歌って聞かせる学生もいた。リーディングの時には居眠りをしていた学生も眠らず練習し、また、英語が苦手で不安な表情を見せていた学生も、生き生きと発音練習に取り組んでいた。発音練習後の合唱では、リズムに合わせて発音することができるようになり、歌いやすくなったためか、1回目より大き

な声で元気に歌い、1クラスではあまりの熱唱ぶりに筆者が褒めて拍手を送る場面もあった。学生が歌っている間、筆者も歌いながら教室を回ると、全員が声を出していることが確認できた。さらに、授業終了後は、複数の学生が練習した通りのリズムで、歌を口ずさみながら教室を出ていくなど、歌を使った発音トレーニングが学生にとって印象深いものであることが窺えた。

第4回目のクイズ形式の発表では、ただ自分のことを伝えるのではなく、クイズとして「出題する」ため、楽しんで原稿を作成する様子が見られた。1名が出題するたびに、答えをどれにするか笑顔で仲間と相談する姿が見られ、正解発表時には一喜一憂するなど、クラス全員が一団となって一つのことに取り組んでいることを実感した。さらに、リーディング時には見られない学生の積極性や好奇心を筆者が知ることになり、発音トレーニングが、学生の長所をひき出す機会になったように思われた。

(2) 副次的効果

発音トレーニングでは、副次的効果が見られた。クラスサイズが比較的大きく、また授業がリーディングであるため、4月の開講から数回は学生同士の交流ができなかった。教室の構造や、授業の進行上、筆者も学生と距離を置くような形になり、教室内に張りつめた空気が感じられた。学生の表情は険しく、重苦しい雰囲気の中、受け身で授業に参加しているという様子である。しかしながら、グループで発音トレーニングを行ったことで、学生同士が交流を行い、授業で笑顔が見られるようになった。さらに、筆者が毎回教室を回って学生の口の構えを確認したり、助言を与えたりしたことで、教師と学生の交流も行われ、互いの心理的距離が縮まったように感じられた。クイズ発表では自分について出題したため、クラスメートのことを知ることができたという意見も複数聞かれた。結果として、発音トレーニングがクラス作りのきっかけとなり、それ以降 Semester 終了時まで、毎週明るく和やかな雰囲気で行うことができた。

6. 考察

今回の発音トレーニングでは、学生は自身の発音の誤りに気づくとともに、発音を上達させたいという向上心の高まりが感じられた。さらに、学生がトレーニングの効果も実感していることが明らかになった。これは、まず、携帯電話の動画撮影機能を使用したことで、学生の発音練習に対する興味を高めることができたことが一因だと考えられる。普段の授業では携帯電話を触ると注意されるが、今回はそれが自身の発音の変化を示す道具となり、トレーニング事前・事後の映像の比較で、その効果を、身をもって知ることができた。発音の向上を自覚することで、トレーニングに対して達成感を感じ、より一層意欲的に取り組めたのではないかと

間と互いに撮影しあう様子も見られ、学生同士の交流も意欲を高めることになったのであろう。消極的な学生も、グループワークでは意見を出すことが求められるので、それまでと比較して、積極的に授業参加しているように見られた。

また、英語の歌も学生の興味を引いたと考えられる。学生の意見にあったが、教科書の英語を読むことには意欲が高まらないが、歌なら印象深く、音が頭に残り、楽しみながら練習できる。上手に歌うためには、英語のリズムや音のつながりをマスターしなければならず、その部分を仲間と何度も歌うことで、英語のリズムや音のつながりが理解できたと感じたことも窺える。授業以外でも歌を歌って練習した学生もおり、発音トレーニングが自主学習につながっている。アンケートを見ても、「7. 英語の歌を歌うことは発音練習のために良い。」が4.7という結果から、学生が歌の効果を実感していると考えられる。

クイズ形式のスピーキングでは、英語発音を意識するだけでなく、クラスメートに自分の言いたいことを伝える、またクラスメートの英語を聞き取ろうといった、コミュニケーションに焦点を当てた活動ができた。それまでの授業では、聞き手を意識せずただ英語を発する状態であったが、今回の発音トレーニングで、「英語を言葉として伝える」ということを学生は意識したのではないかと。スピーキングは自身の発音練習の効果を確認する機会であったが、学生のコメントから、クラスメートの英語発音について興味を持ち、それを評価していることも窺えた。このような様子から判断しても、学生の発音に対する意識が高まったことが示唆される。しかしながら、緊張するとうまく発音できないという問題点も見つかっており、人前で英語を話す機会を増やすなど、英語を話す場を授業で設けることが今後の課題となる。

7. おわりに

今回の発音トレーニングは、学生の英語発音に対する意識を高めるとともに、クラス作りのきっかけともなった。仲間と楽しみながら行える発音トレーニングは、英語を発音することが苦手な学生にとって、有効な学習法であると言えよう。しかしながら、本取り組みでは、一部の子音単音しか指導できていない。学生のさらなる英語発音の向上を考えると、他の音についても指導が必要だと考える。また、4回という短期間の取り組みであるため、学生の英語発音への意識の高まりが長く続くかどうかは観察できていない。長期の取り組みを行うことにより、学生が確実に英語調音法を身に付け、常に英語らしい音やリズムで英語を話すようになることを目指したい。さらに、学生自身は発音の向上を実感しているが、他者から、例えば教師による評価などは行われていない。従って、自己評価以外に、他者評価も取り入れることで、学生が自身の発音をより正確に分析することができるのではないかと。

今回の取り組みから知見を得て、発音トレーニング法を改良し、今後も学生の英語発音向上を目指して、指導を行いたいと考える。その結果、トレーニングを受けた学生が、英語を話す

ことに自信を持ち、コミュニケーション能力を向上させていくことに期待したい。

注

- 1) 「発音指導に時間を取り、丁寧に調音法を解説されたもの」と学生に伝えた。
- 2) 本稿における「曲」は1曲全てではなく、きりのいいところまでを聞くことを意味する。
- 3) 自分のクイズ英文と、クラスメートのクイズの解答が書けるようなシートを作成した。

参考文献

- 有本純編 (2009). 『科研報告書 英語の発音指導法の開発：国際英語の観点に基づく導入から矯正まで』.
- 有本純 (2010). 「音声指導の現状と教師の資質」『関西国際大学コミュニケーション研究所叢書』第8号, 33-43.
- 河内山真理・山本誠子・中西のりこ・有本純・山本勝巳 (2011). 「小中学校教員の発音指導に対する意識—アンケート調査による考察—」『LET 関西支部研究集録』第13号, 57-78.
- 牧野真貴 (2010). 「リスニング意欲向上のためのアクション・リサーチ—洋楽をウォーミング・アップにして—」『リメディアル教育研究』第5巻 第2号, 185-189.
- 牧野真貴 (2012a). 「小学校外国語活動指導者養成における発音指導のパイロットスタディ」『日本教科教育学会誌』第34巻 第4号, 49-57.
- 牧野真貴 (2012b). 「英語リスニングにおける洋楽聞き取りの効果検証—英語に苦手意識を持つ大学生を対象として—」『リメディアル教育研究』第7巻 第2号, 79-89.